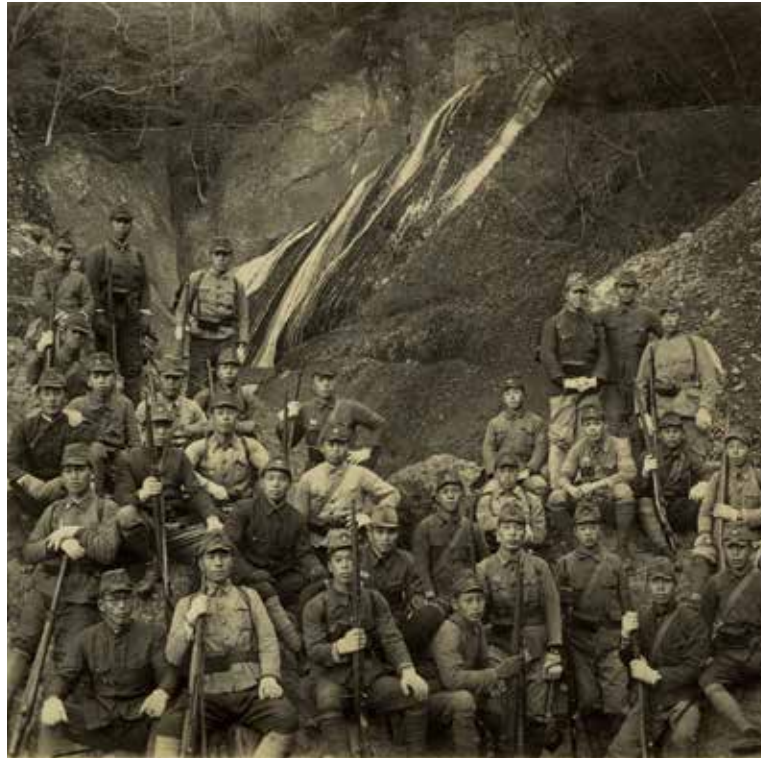


記憶をたどり 未来へつなぐ



戦局が激しくなると、国内の各地でも空襲や艦砲射撃にさらされました。近隣では、軍需工場が集中していた日立市や勝田市現・ひたちなか市に加えて、水戸市も空襲で大きな被害を受けました。村でも頻繁に機銃掃射を受け、水戸市や日立市に対する艦砲射撃が行われたときには、その砲弾が村松晴風荘（現・独立行政法人国立病院機構茨城東病院）や白方、豊岡にも飛来したそうです。

村の戦争被害

戦局が長期化して、戦局が悪化してくると、村民にも大きな犠牲を強いることになりました。特に、昭和19（1944）年7月から終戦を迎える昭和20（1945）年8月までの間に多くの犠牲があり、村民の遺骨を迎えて頻繁に村葬が営まれました。村の忠魂碑には、323人もの名前が刻まれています。戦没者の多くは、20歳前後の若者でした。

村民の出征

昭和12（1937）年以降、当時の石神駅から次々と村民が出征しました。出征を見送る家族や親族のほか、役場職員など多くの人々は、無事を祈り、日の丸への寄せ書きや慰問袋などを持たせたそうです。

今号では、村における戦争の歴史を振り返ります。戦争を経験した世代が少なくなった今、事実を知り、その時代を生きた人の想いに触れて、平和への想いを新たにすることができそうです。

全国各地から戦地へ赴いた兵士がいて、全国各地に戦禍を被った地域があります。全国各地から戦地へ赴いた兵士がいて、全国各地に戦禍を被った地域があります。全国各地から戦地へ赴いた兵士がいて、全国各地に戦禍を被った地域があります。

今月の表紙



今月の表紙は、村に残る戦争に関する遺品です。戦争はたくさんの人に与えました。残された遺品は、その時代を生きた人の想いを映すものかもしれません。

戦地から帰った彼の言葉

10年前のインタビューで
語られた戦争帰還者の想い



故 小川 捨吉さん

当時の石神駅から出征しました。子どもたちが国旗を持って、ずーっと並んでいるのが見えるんですよ。列車が発車して、船場地区のカーブを通るときに、見送る人が見えなくなるんです。そのときに「ああ、これで家に帰れるか、どうなるかわからない」と思ったのは、よく覚えています。やっぱり故郷というの

は懐かしいんですね。じーんときて、涙が浮かんできました。行くときは喜んでいただけ寂しくなつて。あの光景が一番頭に残っています。戦地では、海軍の整備兵として、食事も取れずに働きました。同乗する飛行機が飛び続けられなかったら大変なので、冷や汗をかきながら、真剣にやりました。



故 川上 治さん

東京に行つて、近衛兵として天皇陛下の一族を警護するのが当初の私の任務でした。その後、近衛歩兵团として中国に強行軍で応援に行つたんです。1日に40キロメートルほど歩きました。これを4日間続けて、ようやく目的地に着きました。そこで、警備や作戦を実行して、その後も、場所を移動して、警備

を続けていました。戦地に行くまでは、戦争の怖さについていうのは誰も分らないんですね。旅行に行く気分で行つて、味方が倒れているのを見て初めて、「やらなければやられてしまう」と感じるものだ、と私はよく言っています。敵愾心っていうのは、そこで初めて生まれるんですね。



故 大内 武さん

私は、山砲兵として、インパール作戦に参加していました。ひどい状況。いやもうひどいです。食料もないし、本当にひどい。仲間もたくさん亡くなりました。言葉に言い表せません。「お前の代わりに持つていくからな」って、巻脚絆(まきくわん)という装備を解いて、それを自分で巻き直して歩いて帰りました。「あの兵隊

たちはきちんと埋めてもらえたのかなあ」と考えることがありました。終戦のときは、「ああ、戦争に負けちゃったんか」と、それしか考えていませんね。戦争に負けちゃつて、これからどうなっていくのか、それだけを心配しました。何年も戦争に行っていたので、帰つて来られるとは思っていませんでした。

語り継ぐ戦争



佐藤 弘子さん

父は中国の蘇州で亡くなりました。当時私は生後5か月。父が亡くなつた後、母は、中国から船と列車を乗り継いで、私をおんぶしながら、遺骨を持って帰ってきました。母には「遺骨だけは持つて帰らない」という思いがあったそうです。私には直接言わなかったけれど、母の苦勞を思うと、今でも涙が出ま



川崎 道隆さん

マリアナ諸島のテナン島で父が亡くなつたとき、私はまだ小さかつたので、記憶はありません。終戦から31年後の昭和51(1976)年に、遺族会主催のテナン島で遺骨を収集する取り組みに参加しました。初めて遺骨を見つけたときは、本当にショックでした。集めた遺骨の中に、父の遺骨があつたのかどう



故 松本 いねさん

夫は、私と結婚する前に2回ほど召集されたそうです。だから、召集令状が来ることを覚悟していたみたいです。ただ、「本当は行きたくない」とこぼしていました。召集令状が来たときには、私のお腹の中に子どもがいました。出産予定日を過ぎていたので、行く前に生まれるかなと思っていたところ、出

帰りを待った家族の想い

今も色あせない家族の想いと
10年前のインタビューで語られた夫の思い出



佐藤弘子さんの父

す。父が戦争で亡くなつたからこそ、嫁ぎ先で頑張つたのだと思います。

これからの時代は、戦争の記憶がどんどん薄れていくかもしれません。が、若くして戦争で亡くなった方に想いをせ続けてほしいと願います。



川崎道隆さんの父

かとは分かりません。父がどんな思いで亡くなったのかを考えると、やるせなかつたです。中学3年生のとき、戦争遺児だけで靖国神社に参拝しました。学年で50人以上。それだけの家族の人生を変えた。戦争はやるもんじやない。



松本いねさんの夫

征日の2日前に生まれてきてくれて、子どもの写真を持つて出征していきました。夫は出征から1年で、ニューギニアのテレブ島で亡くなりました。受け取った骨箱には石か何かが入っていて、夫の遺骨はありませんでした。



歴史と未来の交流館 学芸員
林 恵子さん

「戦争と東海村」

戦後70年となった約10年前、戦争を体験した方々に話を聞けるのは今しかないのではないか、という危機感を覚えました。そこで、出征した村民や東海村遺族会の方に話を聞き、その様子を動画に残すことにしました。それが「戦争と東海村」のDVDです。村民にとっての戦争を記録に残せたことは、とても意味があったと思います。このDVDは各小中学校や村立図書館にもありますので、皆さんに見ていただけたらうれしいです。



戦争がリアルに

戦争に行かれた皆さんは、当時のことを昨日の次のように、いかにひどい状況だったかを教えてくれました。「苦しい思いをしているのは誰も同じなので、人に話すことではない」と思っていた方も、晩年になって、「誰かに伝えよう」と、戦争の話をするようになったそうです。

「戦争が怖いと思うのは今が平和だから。それが現実になると、怖いという問題ではなくなる」と言われて、ハツとしたことをよく覚えています。話を聞いていると相手の感情が伝わってきて、知識としてあつた戦争に、人の感情がひとつひとつ入ってきて、自分の中で戦争がリアルになった感じがしました。

出征された方に「終戦のときにどう思いましたか」という質問をしました。辛い戦争が終わつてうれしかった、か、敗戦国になり悲しいなどの答えを想像していましたが、実際には「何も思わなかつた。これからどうなるんだろうと思っただけ」という答えでした。疲れ切っていたのかもしれません、がとても印象的な言葉でした。

家族の苦勞を慮る

おもんばか

ただ、私自身も戦争は経験してないので、特に共感したのは、残された家族の話を聞いているときでした。遺族の中には、話しながら涙する方もいました。戦死した父の無念や戦後の母の苦勞を聞いているときは、私も涙が出ることがありました。亡くなった場所も分からない、遺骨も帰って来ないというのは無念だろうと思います。

「戦争は、普通の人の当たり前を壊し、人生を180度変えるもの」。そう語った遺族の言葉は、今でも私の心に深く残っています。

平和な未来へ つなぐ想い

村では、小学6年生と中学1・2年生を対象に「東海村小・中学校平和大使広島派遣事業」を実施しています。この事業は、各校から選ばれた児童・生徒が平和大使として、平和学習や広島県での平和記念式典への参列、原爆ドームや平和記念資料館の見学などの活動を通して、平和への理解を深めることを目的に実施しているものです。

今年度も事前学習を経て、8月4日から6日に広島県での平和学習を実施しました。今回は、平和大使リーダーの2人に、平和への想いを聞きました。

なお、11月1日(日)には、東海村文化祭で、「令和8年度第14回東海村小・中学校平和大使」の報告会を行います。ぜひ、お聞きください。

科学の使い方

身近に原子力施設があったことから、原子力に興味を持ちました。その原子力が戦争のための兵器に使われていることを知って、正しく使えば人が幸せになるものが、人を傷つけるために使われていたことに衝撃を受けました。広島平和記念資料館に行き、自分の目で現実に起きたことを確かめたいと思い、参加しました。



東海中学校2年
金子 健悟さん

使える環境であり続けることが「平和」だと思うので、そのために、「正しい使い方をし、自分たちが平和な世界をつくっていく」という意識をみんなが持てるようにしていきたいです。



東海南中学校2年
阿部 暁乃さん

参列する平和記念式典で感じた想いを、校内発表などを通して周囲に広げ、たくさんの人に自分たちの「平和」と、そのためには何ができるか、ということを考えてもらいたいと思っています。

笑顔が平和

昨年聞いた、平和大使の先輩の校内発表が、とても素晴らしく、「私もやってみたい」と思い、参加しました。平和大使として学ぶ中で、戦争は大きな被害をもたらしているなど、戦争の恐ろしさを知りました。

「自分にとって大切な人と笑顔で居続けること」が私が考える「平和」です。多くの国と地域の人が

村に残る戦争の記憶

村内には、戦争で犠牲となった兵士の魂を供養する忠魂碑や、戦争に関わる遺構・遺品が現存しています。



↑ ちゅうこんび 忠魂碑 (大山台)

忠魂碑とは、戦争で犠牲になった方々を称え、記念するために建立された碑のことです。この場所には、日清戦争・日露戦争から太平洋戦争に至るまでの戦争で、戦地に赴き亡くなられた方々の名前が刻まれた2基の忠魂碑が設置されています。右側の忠魂碑には、石神村出身の戦没者138人の名前が、左側の忠魂碑には、村松村出身の戦没者185人の名前が刻まれています。戦没者の遺族は、「国のために命を捧げた英霊に、手を合せて黙とうを捧げるような時代になってほしいです」と話します。

→ ちかごう 地下壕 (舟石川)

村内でも、本土決戦に向けた準備が進められていたようです。これは太平洋から敵が上陸してくることを想定して、身を守りながら敵を攻撃するための陣地として、軍によって作られたもので、村内各所に同じような地下壕があったそうです。当時は陣地内で人が立つことができる深さに掘られており、兵士たちは、機関銃などの装備とともに村に滞在しながら、そのときを待っていたようですが、実際には使われることなく、終戦を迎えました。



← 戦争の遺品 (歴史と未来の交流館所蔵)

日の丸には、寄せ書きが書かれています。これは、出征する村民の無事を祈って家族や友人などの身近な人が書いて持たせたものです。赤い糸で装飾された布は、「千人針」と呼ばれ、多くの女性が1枚の布に赤い糸で結び目を縫いつけたお守りです。また、これには五銭や十銭硬貨も縫い付けられており、「五銭」は「死線(しせん=四銭)」を超え、「十銭」は「苦戦(くせん=九銭)」を超えるという語呂合わせに由来しています。無事を祈る人々の想いを乗せたお守りと共に出征したのです。



《 あなたにとっての平和とは 》

世界各地で戦争や紛争が起きている今だからこそ、戦争の歴史を振り返り、自分にとっての“平和”を考えてみませんか。